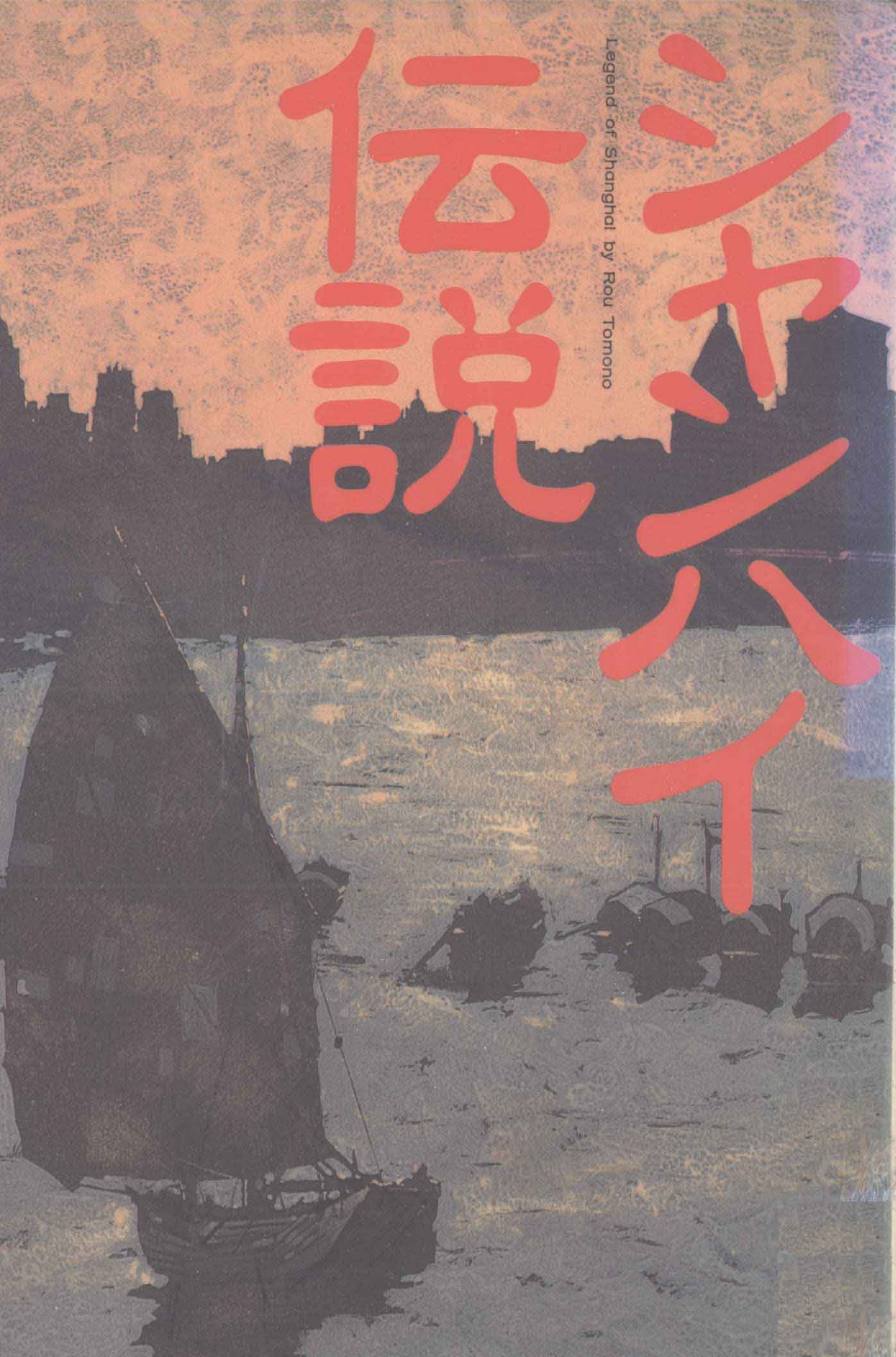


Legend of Shanghai by Ryou Tomono

上海伝説



シヤンハイ

Legend of Shanghai by Rou Tomono

伝説



伴野朗

シャンハイ伝説でんせつ

一九九五年九月三〇日 第一刷発行

著者 伴野 朗とも の ろう

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

郵便番号 一〇一—五〇

編集部 (〇三) 三二三〇—六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三二三〇—六三九三

制作部 (〇三) 三二三〇—六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 ナショナル製本協同組合

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1995 R. TOMONO, Printed in Japan
ISBN4-08-774158-3 C0093

目次

霧のブロードウェー・マンション	5
血の「七六号」	37
郵船碼頭の怪	71
静安寺路の襲撃	103
愛憎の外灘	135
疑惑の跑馬厅	167
南京路の幻影	201

装 装
丁 画
／ 山
岡 野
邦 边
彦 进

シャンハイ伝説

霧のブロードウエー・マンション

上海は、不思議な魅力を持つ街であった。一口でいえば、

——東洋のなかの西洋。

ということができようか。街の歴史はそれほど古くない。アヘン戦争の敗北の結果、清朝がイギリスと結んだ南京条約（一八四二年）によって、開港された。列強諸国の進出、租界の設置によってもたらされた徒花のような繁栄は、まだ百年経っていない。

中国にあつて、中国でない街——それが上海であつた。そのよい例は、黄浦江に沿つたウォータ―フロント、外灘（バンド）の北端にあるパブリック・ガーデンの入口の立看板である。そこには、

——狗與華人不准入内（犬と中国人は入るべからず）。

と書かれていた。この公園は、共同租界内にある。

上海はいま日本軍の占領下にあつた。昨年に当たる昭和十二年（一九三七年）七月七日、北京南西郊の盧溝橋で、日本軍と中国軍が衝突した、いわゆる「盧溝橋事件」を契機に日中戦争が勃発、戦火はただちに上海に飛んだ。第二次上海事変である。八月十三日のことであつた。

日本は続々と陸軍を増派、戦線は上海から南京、武漢へと拡大していった。

上海での交戦とともに、中国人は比較的安全な、共同、フランス両租界に逃れ、不安な日々を送っていた。

だが、上海の繁栄には変りはなかった。租界の盛場のナイトクラブでは、ジャズのリズムが刻む狂躁のなか、妖艶なダンサーが腰をくねらせてステップを踏んでいた。アヘン窟は常習者で繁昌しているし、街頭の娼婦たちは男たちに流し眼を送っていた。

これまでと変らない上海風俗が、そこにあった。

その意味では、上海はちつとも変わっていなかった。相変わらず、東洋経済の中心地であったし、国民党、共産党両勢力のせめぎ合いの場であり、日本との矛盾が激突する戦場でもあった。

昭和十三年（一九三八年）八月十日のことである。

また暑い夏が、この黄浦江に沿った街にめぐってきていた。

仕立てのよい白の麻の背広に、薄いピンクのネクタイ、白のパナマ帽の紳士が、上海の言葉で「黄包车」と呼ばれる人力車に乗って、ガーデンブリッジを南から北へ渡ろうとしていた。小柄だが、毅然としていた。背をピンと張り、その涼やかな黒目がちの双眸は、前方をしっかりと見詰めていた。

ガーデンブリッジは、一九〇七年に建設された蘇州河に架る橋である。中国語では、

——外白渡橋。

という。外国人が無料で渡れる橋という意味だ。イギリスのクリーブランド橋梁社のマイネ技師が設計したワーレン・トラス架構の二連を、上海のホワース・アースキン社が組み立てた。現在の位置へ架橋する前に、楊樹浦路の瑞塔造船所でいったん組み上げ、それからこの現地へ移したものだ。

橋の右手は黄浦江で、日本の軍艦が、海軍旗をはためかせていた。橋の下を蘇州河が流れ、黄浦江に注いでいる。この川は、呉淞江ウスンチャンとも呼ばれ、オールド上海を南北二つに割っている。茶色の河水を掻き分けて、平底の動力船が、十数隻の石炭を満載した荷船を引いて、黄浦江に出ようとしていた。橋の北詰めは、黄浦江に沿う形で四つの外交公館が並んでいる。左からソ連、ドイツ、アメリカ、日本の各総領事館である。ソ連総領事館の対面には、アールデコ風のがっちりとした洋館があった。アスター・ハウスである。一階には日本陸軍のクラブ「偕行社」かいこうしゃがある。

北詰めの西側に怪鳥が翼を広げたような形のビルが、立ちはだかっていた。

四年前の昭和九年（一九三四年）に完成したブロードウェー・マンションである。中国語では、

——百老匯大廈バイラオホエグレイシヤ。

という。きわめて鋭角的である。その意味では、フランス租界のグロスバーナー・ハウス（峻嶺公寓）しゅんりやうによく似ている。

二十一階建て、高さ七十六・七メートル、平面面積は二万四千五百九十六平方メートルに達する。二階から九階は、それぞれ大型のマンション四室と小型マンション四室、それに十九の客室、十階から十四階には十五室、十五階から十六階には十六室がある。十八階は特等室である。十七階には食堂と厨房があり、十九階以上は機械室であった。

このマンションは、主に長期滞在者によって利用されている。

最上階は、地盤がもろい関係で、わずかに東へ傾かたいており、鉄球を西端へ置くと、東へ転がるという。このことを苦にした設計責任者のアメリカ人技師が自殺した、という悲話が伝わっていた。

紳士は、マンションの前で車を降り、正面ドアの前に立った。ボーイが恭しくドアを開き、彼を迎えた。その丁寧な態度は、日ごろからたっぷりチップをもらっていることを物語っていた。

レセプションで鍵を受け取った。傍にずんぐりとした坊主頭の男がいた。年のころは二十六、七。眉が太く、不敵な男っぽい面構えをしていた。男は紳士の顔を見ると、

「あつ、川島先生！」

といった。紳士は男の方をチラッと見た。

「ああ、児玉君か。いつ来たんだい、上海へ？」

男にしては、甲高い声である。

「昨日着いたところであります……」

男は、直立不動の姿勢でいった。

「よかったら遊びにきたまえ。いつもの一五〇一号室だ」

「はい、必ずうかがいます……」

児玉は、エレベーターの方へ立ち去る川島と呼んだ紳士の後姿に最敬礼した。川島は、中央部にあ
る二基のエレベーターのうち先にドアの開いた左側に乗り込んだ。エレベーター嬢にチップをはずみ、
「十五階」

と巧みな中国語で告げた。エレベーターが上昇を開始した。

「児玉督士夫か……」

川島は、日本語でそう呟いたが、エレベーター嬢には聞えなかった。

児玉は満洲事変後、大雄峯会の笠木良明の名刺を持って訪ねて来た右翼青年である。福島県出身で、
赤尾敏の建国会、津久井龍雄の急進愛国党などに属し、天皇直訴事件、井上準之助蔵相への短刀送付
事件などを起し、懲役刑に服していた、とその時には話していた。

帰国後、独立青年社を結成、頭山秀三の天行会と組んで政府要人の暗殺を計画したが、発覚し、ま

たもや刑務所に入った、と聞いていた。

川島はかねがね、兎玉を、

——なかなか見どころのある男。

と買っていた。一山当てようと、満洲や上海に渡って来る若者は少なくない。川島自身も、そういった若者の一人であった。だが、川島の場合、事情が異っていた。中国が、もともとの母なる大地であることが……。

川島は、一五〇一号室に入ると、背広を脱ぎ捨てた。シャワーを浴びるためである。川島は色白だった。すべすべした肌をしていた。

シャツの下から見事な双丘が現われた。白桃を思わせる形のよい乳房だった。先端にグミの実のような果実が熟れている。

川島は、女性だった。

男装の麗人、川島芳子——。

彼女は、いくつもの顔を持っていた。

清朝の太宗ホンタイジの嫡系たる肅親王善耆しんしやうぜんきの第十四王女、愛親覺羅顯玪あいしんかくらけんしである。字は東珍とうちん。母は第四側妃のモンゴル王女であった。幼いころからその美貌は一段群を抜き、

——東洋の真珠。

と呼ばれていた。

一九一一年十月十日、武昌で起った辛亥革命の嵐は中国全土に広がり、さしもの清朝も瓦解した。

肅親王は義和団事件以来親交のあった日本軍通訳、川島浪速なみわにまだ幼い顯玪を託した。その後、肅親王は旅順で自殺した。

彼女は浪速の養女となり、

——川島芳子。

となったのである。東京の赤羽小学校へ入学、女学校は、養父の故郷の松本高等女学校で学んだ。成長するに及んで、彼女の天性の美貌にはますます研ぎがかかったが、養父浪速は彼女を「女」として見るようになった。だが、養父と実際に不倫の関係があったか、どうかを立証する証拠はない。実兄の証言という傍証から推測する以外にないのだが、情況は限りなく黒である。

肅親王の没後、浪速は財産管理などのため何度も松本と旅順を往復していたが、よく芳子をとまなっていた。そのころ、彼は芳子の実兄の憲立けんりつに向かつてこういった。

「肅親王は仁者であり、私は勇者である。この二人の血を結合させたら、さぞかし仁勇兼備の子が生まれることだろう」

憲立は、それを芳子と肉体関係を持つことを暗示し、了解を求めたものと受け取っていたという。

芳子が突然髪を切り、男装に踏み切ったのは、大正十三年十月六日のことである。芳子十七歳、浪速五十九歳である。

その前に憲立は、芳子が浪速に執拗に追い回されていると泣いて訴えられたことがある、と述べている。

二十二歳で、かつての父親の部下であったモンゴルの將軍パプチャップの次男で、日本の陸軍士官学校卒のカンジュルジャップと旅順で結婚したが、三年で破鏡、折りからの満洲事変前夜の風雪に身を投じた。

これからの彼女は、「伝説の人」である。女教師や旅芸人などに変装し、満洲各地に潜入して民衆の親日感を煽り、馬賊崩れを買収して第五列を組織したという。天津てんしんの日本租界に潜んでいた清朝の

ラストエンペラー溥儀とその夫人を満洲国皇帝と皇后に据えるべく工作した時も、その脱出一役買った、といわれている。

昭和七年（一九三二年）の第一次上海事変の前にも、ダンサーに扮した彼女の姿が上海にあったという。熱河クーデターの時も、その事件の黒幕として「鉄血義勇軍」を組織した彼女の存在が噂されたものである。

——東洋のマタハリ。

彼女は、そう呼ばれることが好きであった。

芳子はシャワーのノブを回した。冷たい水が降り注いできた。それを全身で受け止めた。肌が火照っているだけに気持ちが悪かった。

三十一歳の女盛りである。肌が水をはじいた。

凝脂である。白楽天は「長恨歌」のなかで、楊貴妃の肌の美しさを、

——水滑らかにして、凝脂を洗う。

と詠っている。彼女は、先ほど昼食の席で小耳に挟んだ話を思い出した。

——重慶から藍衣社に暗殺指令が出たらしい……。

情報源は、CC団に繋がる上海の金融業者である。藍衣社とCC団は、蒋介石の独裁体制を維持するために、手段を選ばない恐怖の秘密結社である。前者は黄埔軍官学校卒の軍人を中心に、戴笠が率いている。後者は党人派で組織され、陳果夫、立夫の兄弟が指導している。

同じ目的を持ちながら、この二つの結社は対立、反目を繰り返した。このため、二つの組織を一本化し、軍事委員会調査統計局（軍統局）が誕生した。局長には戴笠が就任していたが、両者の反目は

まだ解消されてはいなかった。個々の活動は、藍衣社、CC団単位で動くのが常で、互いに相手の工作内容を洩らしたり、足を引っ張ったりしている。

だが、このところの藍衣社、CC団をはじめとする三民主義青年団、忠義救国義軍などの重慶特務の暗躍には眼に余るものがあつた。親日派の中国人に限らず、日本人の間にも彼らの毒牙にかかる犠牲者が出ていた。

芳子の手が、乳房を撫でていた。張り切つた乳房の奥で、なにかが燃えていた。

——男が欲しい。

芳子は、男臭い容貌の児玉のことを思い出していた。

2

上海に特務機関が設置されたのは、一カ月前の七月二十四日であつた。機関長は黄河流域の作戦に従事していた第一四師団長から転じた土肥原賢二中将である。その下には大迫通貞少将、和知鷹二大佐、晴気慶胤少佐らが配されていた。本拠は虹口の施高塔路の重光堂に置かれていた。

彼らに与えられた任務はいわゆる「支那事変」の短期解決であつた。一つの構想があつた。日本軍占領下の中国に大物政治家による親日の中央政府を樹立することである。この政府には、旧軍閥の呉佩孚が協力する算段が立っていた。

問題は、蒋介石に対抗できるほどの大物を誰にするかであつた。土肥原が白羽の矢を立てたのは、上海在住の国民党の長老、唐紹儀であつた。

唐紹儀は、広東省番禺県出身で、この時七十七歳。その経歴は多彩である。

十四歳で渡米、コロンビア、ニューヨーク両大学に学び、帰国後、李鴻章、袁世凱のもとで通訳官として働き、税関長へ。一九〇七年には奉天巡撫となり、翌年義和団事件賠償免除の謝罪使として、アメリカを訪れた。

その後、郵伝部大臣に就任した。辛亥革命では、袁世凱の命を受け、北方代表として上海講和會議に出席、南方代表の伍廷芳との折衝に当たった。一九一二年三月、袁世凱臨時大總統のもとで、民国最初の國務總理となった。だが、袁世凱と対立、わずか三カ月で辞任、上海の実業界に入った。

帝制問題が起ると、反袁世凱の態度を明らかにし、第三革命に際しては、帝制反対に起ち上がった。一九一六年六月、段祺瑞内閣成立とともに、外交総長に就任したが、張勳らの排斥にあい、辞任した。

その後、孫文とともに広東軍政府を樹立し、財政部長、國務總理、外交総長などを歴任、国民党西南派の要人として重きをなした。三四年に長年務めていた中山県長を辞し、香港を経て、上海のフランス租界に閑居していた。

国民党内では、孫文の直系を任じ、軍人出身で肌合いの違う蔣介石とは感情的とっていい対立関係にあった。

重光堂の奥まった一室で、着任間もない土肥原は、一人の男と相對していた。相手は、薄手の長袍を着こなししている痩せた小柄な男である。七月二十七日の昼下りだった。

男は、どこにでもいるような平凡な顔立ちをしていた。必要なら、いつ、どこでもあつという間に群衆のなかに溶け込むことができた。彼の経歴や正確な年齢を知っている者は、この広い上海にもいなかった。